

戸塚 宏の"にんげん"教育学

平成 12 年 1 月より 1 年間、戸塚校長は月刊「日本」（株）K & K プレス発行）で連載を行いました。そこには、校長自身が長い時間をかけて解明した"にんげん"教育学が、非常に科学的に示されています。

なお、月刊「日本」に関するお問合せは TEL 03-5211-0096 「株）K & K プレス」まで。

1 月号 「まずは体罰」

2 月号 「儒教は"科学" I」

3 月号 「儒教は"科学" II」

4 月号 「仏教も"科学" I」

5 月号 「仏教も"科学" II」

6 月号 「独を慎む」

7 月号 「力は正義」

8 月号 「知仁勇の三者は天下の達徳なり」

9 月号 「理性は創るもの」

10 月号 「進歩に見放された子供達」

11 月号 「幸福、喜び、感謝」

12 月号(最終回) 「科学的な『精神論』を創ろう」

「まずは体罰」

戸塚ヨットスクールの名前を聞いて、まず頭に浮かぶのは「体罰」でしょう。当時のマスコミは体罰否定論のオンパレード。小中陽太郎氏のような、戦後民主主義の権化が我々のおかげで大活躍をしました。

「戸塚君、体罰をしたら大人の負けなんだよ」「力では何も解決しないよ」「体罰は子供の心に一生癒せない傷を残す」としたり顔で言われものです。

この、アメリカ渡来のエセヒューマンイズムが子供をダメにし、ついに学級崩壊という事態にまで至りました。

「体罰」とは何か

「小中さん、教育とは何ですか？」「教育は教育じゃないか。だいたいそんなことだから君は…」

エセヒューマンイストは天動説を人に押し付けるため、科学的議論を何よりも嫌います。

「教育は愛、体罰は悪」「子供には無限の可能性」「自主性尊重」「話せば分かる」「子供は自由」「子供にも権利を」「子供にも理性」「人間は皆平等」「先生と生徒は友達」…。

戦後民主主義教育で正しいと言われたこれらの言葉は、全て天動説、非科学的なことです。

体罰の定義のできない人が体罰反対を叫んでも、それは何の意味も持ちません。民主主義の意味の分からないマスコミが「民主主義を守れ」とわめくのと同じこと。

体罰と暴行は見かけは同じですが中身が全く違います。『有形力を行使することによって子供を進歩させることを目的とする』のが体罰、『自分の利益を目的とする』のが暴行。体罰にはどこにも犯罪性はなく、教育そのものなのです。

スクールでの経験からして、体罰を加えると子供は精神的に安定し、表情が穏やかになります。これは大人が本気で自分を進歩させようとしている、と体感するからです。

更には「この人は自分より強い。だから、いざという時に守ってくれる」ということも分かります。父親や先生が力のある人間だという確認が子供を安定させるのです。自分と同等の力しか持たない"友達"では、自分を守ってはくれません。

子供が人をにらみつけたり、バカにした顔をしたり、上目遣いをしたり、目が吊り上がっていたり、暗い顔だったりするのは、彼

らが本能的に生命の危機におびえているからです。彼らは本能で、自分が弱い人間であり、その自分を守ってくれる大人がいないことを感じているのです。

男の基本的な仕事の1つは、弱い女子供を守ること。その男が弱ければ、子供が不安になるのは当然のことです。ましてや母親が「うちのお父さんはダメだ」と、その弱さの確認を手伝ったりすれば、子供の目が吊り上るのも当たり前です。

本能に素直になること

『快を求め不快を避ける』が人間の行動原理です。

子供が勉強すべき時に、サボっていたり、しゃべっていたりすれば当然怒りが湧いてきます。この時の感情(怒り)は本能から出てきたもので、子供に対して何らかの攻撃行動をとることを命じています。だから我々は子供を叱ったり、体罰を加えたりします。

こうした感情に素直になるべきです。これは本能的に子供の進歩を願っての行為です。溺れる子供を見て、思わず飛び込んでしまう。遊んでいる幼児を見て、思わず微笑んでしまう。これらと全く同じ目的を持った本能的な行動です。

儒教は"科学" I

"科学"の定義は「再現性」です。

科学者とは、時間・空間を超えて、再現可能な「法則」を創る人のことです。いつ、どこで、誰が行っても同じ結果が出なければ「理論」とは呼べないし、科学ではありません。

「子供には無限の可能性がある」「子供は限りなく自由である」「子供は大人と同じ利益を有する」「子供にも理性がある」「子供にも人格がある」「体罰は悪いに決まっている」等々のマスコミ論調を叫ぶ連中は、初めから科学を否定していると言えます。

体罰反対を心の底から信じているとすれば、それは子供の幸せを願わない、命を助けようと思わない、可愛いとも思わない、進歩も願わない弱い男だということです。

本能は我々の中にあります。それは必要だからあるわけで、いい悪いという次元の問題ではありません。ましてや好き嫌いで本能を否定するのは神をも恐れぬ行為です。

本能は30数億年の歴史の試練に耐えて、今我々の中にあり、まだ50年の歴史しか持たない戦後民主主義など比べものにもなりません。

体罰反対論者は、自分の中にあるもの、自分自身よりも、アメリカの言うことの方が正しいと信じている、弱い男、ダメな男です。こんな男がイニシアチブをとるから国が減びるのです。

「力」は群れのためにあり、力あるものがリーダーとなり、群れをリードしていくのは当然のことです。力を否定する者が他を指導することなどできはしません。

『君子は本(もと)を務む、本(もと)立ちて道生ず』

もっと本質を踏まえた、"科学"的な議論をすべきです。

古典と呼ばれるものの多くは科学です。科学であるがゆえに、時間・空間・人種を超え、今の我々にも理解できます。儒教に共鳴できるのも、それが科学だからなのです。

それとは逆に、科学の上にあると信じ続けられたものがあります。

例えば聖書です。信じる者にとっては古典ですが、信じない者には何の意味もありません。これはどうしても天動説になってしまいます。さらに、それを信じる勢力が強大な時には、

その天動説の被害は外国にまで及びます。日本の学級崩壊など、まさにこの天動説の被害に他なりません。

現在の日本の人権思想の本は『世界人権宣言』です。だから、我々はまずこれを読む必要があります。

『君子は本(もと)を勉む。本(もと)立ちて道生ず』
読めば、「これは天動説だ」とすぐに気がつきます。

まず第一条、「人間は生まれながらにして自由であり、権利と尊厳について平等である。理性と良心を付与されており、互いに同胞の精神で行動しなければならない」、見事なまでの天動説、キリスト教思想です。

理性を創るのが教育

日本の精神の伝統はもっと科学的。昔から東洋では、自由・権利・尊厳・平等・理性・良心は全て「あるもの」ではなく、「創るもの」とされています。努力して行動し、創り上げるものです。その日本でキリスト教的天動説を運用すれば、必然的に学級崩壊を招きます。

なぜなら、教育とは「正しく、強く、安定した理性を創る」ことだからです。初めから理性があるなら、教育など必要ありません。

例えば「自由」。風が強く、波が荒く、身の毛もよだつ海で、ウインドサーフィンを「自由自在」に操れる者がいます。これは技術と体力を創ったからできることです。「権利・尊厳・平等・理性・良心」にしても然り。

日本の役人やインテリは、どうして『世界人権宣言』をすんなり受け入れてしまったのか。アメリカのいうことだから間違いないと思い、きちんと検討しなかったに違いありません。それが未だに続いている。

子供の世界に問題が生じると、政府は「まず、カウンセラーを増員し…」などとピントはずれなことを言います。これは天動説です。

子供を取り巻く環境を変えてみたところで、問題の主体である子供を変えなければ意味がありません。子供に理性を持たせることこそが、問題の根本的解決策なのです。

私は逮捕されてすぐ、心理学の勉強を始めました。

心理学とは「精神」を説く学問です。それではまず「精神」は…と心理学辞典を引いてみてびっくり。なんと「精神」の項がないのです。「精神」を語らない「精神」の学問、なぜそのようなことになったのか。

欧米人にとって精神とは神そのものです。つまり科学の上に立つ者。それを定義するような恐れ多いことができるはずもありません。

目指すは『文武両道』

儒教は科学です。

『まことに日に新たに日々に新たに、また日に新たなり』(大学)。

これは「全てが変化する」ということです。全て変化しなければ科学は有り得ません。科学とは「変化の法則」だからです。創造論は科学足り得ません。教育が科学でないというなら、学校も教師も存在し得ないのです。

「民を新たにすること」が権力者の仕事です。新たにすることは進歩させることです。進歩したことを実感した時に生ずる快感が幸福なのですから、「民を新たにすること」とは、「民を幸福にする」に通じます。神が人間に生まれながらにして理性を授けたのなら、人間は生まれた時から神に幸福を奪われていたことになり。さらに、欧米の心理学はロゴスを過大視したことで、感情と意思を軽視するという欠点も持っています。

日本流の『文武両道』にさえすれば教育崩壊など、すぐ収まってしまうのに…。

儒教は"科学" II

マスコミは教育を科学的なものにしたいのか、それとも科学的であってはいけないと思っているのか。

「精神は崇高なもの」「愛がすべて」「叱るより褒めろ」「子供には無限の可能性」「子供の自主性尊重」「差別はダメ」「いじめをなくせ」「個性を伸ばす教育」等々のマスコミの論調は全て非科学的です。

教育を非科学的にするもの

日本人は権威を尊重する民族です。これは素晴らしいことですし、それ故日本が一等国になったと言っても過言ではありません。ただし、その権威が正しいことが必要で、間違っていれば国を滅ぼすことにもなります。

先日、NHK・BS放送の「地球法廷」という、インターネットによる討論番組に「お受験の危険性」というテーマで投稿しました。内容は、「お受験は戦略をないがしろにし、戦術のみを目指している。つまり、人間性を完成させずに社会的勝者を目指しているからダメなのだ。解決法は『文武両道』である。文は"知"を、武は"情"と"意"と肉体をトレーニングする」というものです。

ここで驚いたのは、反論がたったの3通しか来なかったこと。その少ない反論も、重箱の隅的なものが2つ、まさにマスコミに毒されたと言うべきものが1つ。最後の1つを簡単に書くと、『「～をしないと～になる」「～だから～になった」という教育は間違っている。人間は、色々な要素が絡まりあって1つの人格が完成していく。私はあなたに、自分の理想像を子供に求める親を見た。そして、1つの型にはめていく教育を。教育は個性を大切にすることが大事。教育に黄金律はない』というもの。まるでマスコミ論調そのままの天動説・非科学性です。具体的なことは何一つなく全くの抽象論。教育が科学なら、「～をしないと～になる」「～だから～になった」という、実績に裏付けられた法則・理論に基づくのが当然です。それを否定したら教育もしつけも成り立たないし、学校も先生も存在し得ません。

彼は「押し付けはいけない」と言いたいんでしょうが、「押し付けはいけない」という仮説を人に押しつけ、「型にはめてはいけない」という型に人をはめ込もうとしていることに気付いていません。私の言わんとしているのは戦略論であって、型とは戦術論のことなのですが、彼には難しすぎて分からないのでしょう。自分が何を言っているのかさえ分かっていないのですから。教育とは何かも分からず、教育の目的も分からず、教育について語っているのです。

恥の必要性

『知行合一』(王陽明)、『皆実学なり』(中庸・朱熹章句)、『学びて時にこれを習う』(論語)、『身を修める』(大学)、『浩然の気を養う』(孟子)、儒教はこれらの科学性を尊重する言葉で満ち溢れています。そしてこれらの言葉こそ、『文武両道』と同じ意味なのです。

"科学"とは法則化すること。その法則によって結果を再現すること、つまり再現性こそが"科学"です。現実起こらないことは科学ではなく、行動で実証されなければ科学ではありません。さらに人間は、行動抜きにはその法則をものにできません。知育だけでは人間性も社会性も進歩せず、前述の者のような、知だけで他人の上に行こうとするハタ迷惑な人間ができあがるのです。日本の教育はこんな人間を大量生産しています。

『恥を知るは勇に近し』——「恥」は感情、それも不快感。「勇」は進歩しようという意志。恥という不快感が、進歩しようという意思を発生させます。恥が大きければ意志も強くなり、結果、進歩も大きくなります。

人間は感情が強くなければいけません。進歩は自分の行動によってのみ得られるものです。まず、自分自身が進歩しようと思わなければなりません。

では、どんな時に人間は進歩しようと思うでしょうか。それは自分がダメだと自覚した時です。他人と比べればすぐに分かることですが、子供の場合は大人が評価してやったほうが

有効です。叱ればいいし、体罰を与えればいいのです。「叱るより褒める」は子供の進歩を願わない大人の言うことです。

子供は自分自身を知った時に進歩しようとします。大人と同等にされたら、もう進歩する必要はありません。『快を求め

不快を避ける』が人間の行動原理ですから、子供に「大恥をかける」能力をつけてやるのが我々のなすべきことなのです。

恥を知る者は「自主的」に進歩します。

仏教も"科学" I

ヨットスクールの生徒に「儒教や仏教といった東洋的な精神はまことに科学的なのに、欧米のキリスト教的精神論は天動説で、非科学的だ」と説明すると、みんな怪訝な顔をします。「げに恐ろしき因縁かな」「親の因果が子に報い」「業の強い人だ」「過去生・現生・来生」「地獄極楽」など、とても科学とは程遠い言葉が並んでいるからでしょう。このような解釈ができたのは、仏教がいつのまにか宗教に変化してしまったからです。仏教を宗教として説明しなければならないお坊さんは、様々な矛盾に悩んでいるはずで

あるいは『照見五蘊皆空(しょうけんごうんかいこう)』の「照見」は原文では「観察した」「法則化した」と2つの部分に分かれており、意味がはっきり分かります。

だいたい、『般若心経』の説明を聞いて、その意味が理解できるでしょうか。「目もない、耳もない、鼻もない…」などいわれて、素直に「その通り」と納得できますか。

『不生不滅(ふしょうふめつ)』を「あなたは生まれたわけではないのだから、死ぬこともない。安心なさい」と訳されればかえって不安になるだけです。

だいたい『般若の知恵』とは、いったい何のことでしょう。せつかくのありがたい『般若心経』も、解釈をきちんと("科学的")にしてやらなければ、苦をなくすどころか、かえって苦の種になってしまいます。

『君子は本(もと)を務む、本(もと)立ちて道生ず』

仏教を本当に理解したければ、原始仏教を読まねばなりません。それも、できればサンスクリット語かパーリー語で。漢字のお経は漢訳ですから既に他人の哲学が入ってしまっており、「生の情報」ではなくなっています。つまり、インフォメーション(処理された情報)であり、インテリジェンス(生の情報)ではありません。

有名な『般若心経』も、漢文だと意味がつかめないところが、サンスクリット文を読めば簡単にわかります。例えば『無智亦無得(むちやくむとくいむしよとくこぼだいさつた)』をどのように区切ったらよいか、何百年も論争されてきましたが、サンスクリット文では「無智亦無得」「以無所得故、菩提薩た」とはっきり区切ってあります。何百年も論争するような問題ではありません。(※「た」は漢字変換できませんでした)

本(もと)を務めれば『科学』となる

「君子は本(もと)を務む」です。『転法輪経(てんぽうりんぎょう)』というお釈迦様の最初の説教を読むと、弟子アーナンダはお釈迦様の話を聴いているうちに、「生ずるものは必ず滅する」という[遠塵離垢(おんじんりく)の法眼]を得、突然悟りを開きます。この部分と「不生不滅(ふしょうふめつ)」はどうシュミレートするのでしょうか。この矛盾が説明できなければなりません。

『照見五蘊皆空度一切苦厄(しょうけんごうんかいこうどいつさいくやく)』の「度一切苦厄」は、原文(サンスクリット文)にはありません。訳者の玄奘が勝手に書き加えたものです。なぜそうしたのでしょう。それは「五蘊皆空」を強調した

かったからに決まっています。「五蘊皆空」こそが「般若の知恵」なのです。ただし、現在広まっている「五蘊」の解釈は間違っています。仏教は宗教になってしまったがために、次第に意味不明の天動説となり、「ともかく『般若心経』を繰り返し唱えていけば救われる」などということになってしまいました。

『輪廻転生(りんねてんせい)』——「死んでも生まれ変わる」などということがあるのでしょうか。信じろといわれても無理があります。自分が昔なんであったかを、知っている人がいるとも思えません。このあたりも仏教の科学性を疑わしくしています。

仏教も"科学"Ⅱ

我々の知っている仏教には、「科学」と呼ぶにふさわしくない意味不明のごたくが多すぎます。そのため、以前は私も「仏教は教育には無用なもの」と敬遠していました。ところが、拘置所に入れられていた時、周りがあまりうるさく勧めるので仕方なく手にとってみて、驚かされました。

結論から言えば、仏教は「宗教」ではありません。なぜなら『諸行無常』をもとにして成り立っているからです。これは、マルクス・ヘーゲルの弁証法「全てが変化する」、あるいは儒教の「まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり」と同じ考え方です。

「変化の法則」は"科学"です。法則を見つける人が科学者。"科学"の定義は「再現性」で、これを法則・理論と呼びます。

「ダルマ」とは法則のことですが、仏教ではこれが大切だといっているので、明らかに"科学"の匂いがします。少なくとも「宗教」ではありません。宗教は神を必要とし、神は絶対不変のものです。『諸行無常』という言葉は、それを否定しています。死ぬのが怖い、不幸になりたくない、つまり、変化するのが嫌だから人間は絶対不変の神にすがりつこうとします。が、仏教は、「死ぬのは当然」と言っているのです。

『生老病死』、これは『四苦八苦』の「四苦」にあたりますが、どうして「生まれることが苦」なのでしょう。「生」を「生きる」と解釈し、「生きるが苦」と解釈している人もいますが、これは間違いです。原文では「生」は「生まれる」ことになっています。しかし、「生まれることが苦だ」といわれても理解できません。

理解できない、訳が分からない、法則化できないことは、科学ではありません。そこで、もう1度もとに戻って解釈をしなおし、法則を理解してみるのです。すると、仏教は見事に"科学"として甦ってきます。

「本能」は自然なもの

「苦をなくす」ことを目的に、お釈迦様は修行を始めましたが、行き着いた先は大安心の涅槃(ねはん)でした。この経験をもとに、「人間が目的とすべきは涅槃に行くこと」と見極めたお釈迦様は、我々後世の人間に、その方法論を法則化して残してくれました。仏教は、実際に起こったことを法則化したのですから、「科学」であり、唯物論です。

「四法印(しほういん)」「四諦(したい)」「五蘊(ごうん)」「八正道(はっしょうどう)」「十二因縁」「縁起」「因果業報」…すべて、科学的な法則だと思って考え直してみてください。霧が晴れるように、仏教が分かってきます。

儒教と仏教が対立した時、その違いが強調されますが、逆に共通項を探してみます。そうしてみると、これらは、基本も目的も全く同じで、目的に至る方法論が違うだけです。

仏教の目的は「如来」になること。「如」とは、天の声を聞いている巫女の姿です。「如」の心が「恕」。「恕」は「仁」にも「礼」にもかたないです。天の声とは自然のままの心、つまり「本能」です。

「天の命ずる。これを性という」(中庸)。理性はとかくインチキをしますが、本能は人間の力では変えようがありません。

ん。つまり自然だから信用できるのです。昨今「自然に返れ」などと声高に叫ぶ進歩派がありますが、彼らが否定した儒教こそ、自然であることを理想としているのです。

「如来」とは、サンスクリット語で「タザーガタ」といいます。「ガタ」とは般若心経で有名な「ギャーテーギャーテー」のことで、「到達する」という意味です。儒教でいえば「止」あるいは「得」のこと。「タザー」とは「その如くに」、つまり、「あるがままの姿で」「自然のまままで」ということです。

今の世の中は西洋思想が主力になり、本能はいつのまにか悪者になってしまいました。しかし間違えてはいけません。本能こそが正しいのであって、理性は往々にして間違っています。

『独を慎む』

『懼(おそれしめて、以(も)って独(どく)を験(けん)す』——人間観察法、「六験」の第4です。

教育の目的は「正しく・強く・安定した理性」を創ることで、そのためには、理性の土台である本能をまず確立しなければなりません。理性とは社会性のこと、本能とは人間性のことです。

『独を慎む』(大学)の「独」は確立された人間性、「慎む」は確立のためのトレーニングをすることです。本能を悪者と考え、無視しようとする西洋流精神論は創造論で、「神が理性を与えた」という出発点が決定的に間違っています。一方で、「理性は創るもの」とする儒教や仏教は、自ずと科学的方法論になります。

東洋流の精神論は、理性も本能も、知・情・意の3つに分けます。例えば、仏教の「瞋(しん)・貪(どん)・痴(ち)」はそれぞれ、間違った「情・意・知」を指します。

「理性」があるものとする押し付け

理性は自分で「創る」ものであって、「ある」ものではありません。「正しく・強く・安定した理性をつくること」が「教育」です。しかし、『世界人権宣言』は、「人間は生まれながらにして理性を与えられている」と謳っており、その基本において間違っています。生まれつき理性があるなら、教育は不要です。これはキリスト教の総論であって、それをまともに信用したから教育がダメになったのです。実は、聖書は総論とは相反することを各論部分できちんと述べてあり、それで全体のバランスが補正されるようになっています。

他国の文化を受け入れて、それを日本的に変えていく。この日本の伝統的なやり方は、儒教や仏教のように総論が正しい「科学」の場合にはうまくいきました。しかし、キリスト教のようにも「宗教」の場合にはうまくいかなかったのです。このことは、我々の思考能力の低さを表しているといえます。

『所謂身を修むるは其の心を正しくするにあり。身に忍(にん)ち(ふんち)する所あれば、すなわちその正を得ず。恐懼(きようく)する所あれば、すなわちその正を得ず』(大学)——儒教は実学ですから、現実に応用しなければ意味がありません。しかし、現場の人間でなければ完全には理解できないでしょう。ヨットスクールでは、これを使ってトレーニングを行っています。(※「ち」は漢字変換できませんでした)

「怒り」は必要だからある

仏教の「瞋」は、普通「怒り」と訳され、「怒るのは悪いことである」などと説教されるので、人は必死で怒りを抑えようとします。これはとんでもないことです。「怒り」は必要だからあるのであって、怒ることは善なのです。しかし、怒り狂うのは「怒り」がパニックになった状態ですから、これは悪です。「忿(ふんち)や「恐懼(きようく)」も同じです。

パニックになるのは精神が弱いからです。家庭内暴力や恐怖症は、忿ちしたり、恐懼したりしている状態ですから、トレーニングで精神を強くしてやれば解決します。また、「怒り」や「恐怖」は本能ですから、正しい「怒り」を起こすために、本能のトレーニングをしなければなりません。

このような神経症的パニックの他に、もう1つ、理性的なパニックがあります。ダメな人間は、何でも人のせいにし、自分で解決しようとしません。だから、次第に怒りが増し、忿ち(ふんち)してしまいます。

『快を求め不快を避ける』が人間の行動原理です。怠け者は行動しないので、怒りがたまり、ついには爆発してヒステリー状態になってしまいます。「怒り」も「恐怖」も"自分"が行動するために発生するので、人を頼る甘えん坊はパニックになりやすいわけです。これが現代の若者の姿です。

行動的になれ

これらの問題の解決法は、本能を強くする以外にありません。『独を慎む』ことです。「懼れしめ」でも自分で何とか行動し、解決すれば、恐懼(きょう)にまでは至らず、人間性は一応のレベルに達しているといえるでしょう。スクールでは、『懼れしめて、その独を験す』を逆に用いてトレーニングをしま

す。「怒り」や「恐怖」、それもできるだけ質の高い不快感を発生させ、それを正しく使うことを繰り返させるのです。人間の脳が予定している最も質の高い不快感とは、「生きるか死ぬか」ですから、「死の恐怖」「生きようとする怒り」で行動させればよいのです。ヨットやウィンドサーフィンはこのメカニズムを持っているため、『独を慎む』効果があります。

「独」とは、簡単にいうと「自分のことは自分です」「行動的になれ」ということです。自分で行動する人は、何か悪い結果が生じてもそれを自分のせいとしますが、行動しない人は全部人のせいとします。近頃、やたらに都合よくアメリカナイズされ、何でも人のせいにする人間が多いのは、彼らの人間性の欠如を物語っています。さらに「独」とは「正しいことをすること」という意味もあります。すなわち善です。(善悪には簡単に分かる判定基準がありますが、ここでは述べません。)

『孟子』の『不動心』の項に、「独」の創り方が詳しく具体的に述べられています。孟子は『浩然の気を養う』といういい方をしていますが、これは『独を慎む』と同じことです。

マスコミは、自分では何もせず、何でも人のせいにするので、すぐパニックに陥ります。これが日本のマスコミの持つ構造的な欠陥です。これを解決するには、マスコミ自身が『独を慎む』以外に手はありません。

『力は正義』

「サカキバラ」から「バスジャック」まで、問題を起こす若者には明らかな共通項があります。これについて、識者は「心の闇」などという抽象論を振り回すばかりで、自分達が何も分かっていないことを露呈しています。とかく専門家なるものは、細部にこだわり本質をつかめません。「"サカキバラ"と"てるくはのる"は違う」などと、どうでもいいことを言う。彼らの言うことは「正しくない」。なぜなら、彼らはこの子達を直せない、つまり能力がないからです。戸塚ヨットスクールのように、「サカキバラ」だろうと「バスジャック」だろうと、きちんと直せる者が実

力のある専門家です。現実に起こらないことは科学ではなく、理論とは呼ばず、「正しくない」のです。

「強く」なければ役に立たない

戦後民主主義を一言でいうなら、「力の否定」です。政治家は悪、文部省は悪、校長も体育会系教師も体罰も競争も管理も校則もみんな悪。権力はすべて悪で、反体制のみを正しいとしています。しかし、この弱者の理論は万

年野党にしか通用しません。そして、教職員組合のように、権力者としての実力のない者が与党になってしまうと、大混乱が生じ、今日の教育崩壊を導きました。弱者の都合に合わせた理論は、必ず破たんします。

「登校拒否は体制に反発している姿であり、正しい」何と馬鹿なことをいうのでしょうか。彼らは行かないのではなく、行けないのです。強さゆえに体制に反発したのならまだしも、登校拒否児は弱さゆえに体制から弾き飛ばされた者、神経症なのです。

——海で溺れている子供がいて、腕に覚えのある男が飛び込んで助け上げ、一命を取りとめた。——この場合、男は強者の理論で子供を助けたのです。体力があり、技術があったために助けることができました。力があってから、強かったから正義が行えたのです。ところが、弱者はこうはいきません。「誰か泳げる人が助けるべきだ」「堤防に柵がないからいけない」「なぜ『危険』という看板がないのか」「保安庁はどうした」…。全て人のせいにします。弱者の理論は現場では役に立たないのです。役に立たないものを正義とはいいません。

「力は群れの為にある」という基本を押さえずして、力については語れません。強い者は力に余裕があります。だから、その力をまず自分の為に使い、余裕のある分を他の人の為に使うことができます。

問題児の共通項は「弱さ」です。教職員組合が育て、女が育て、男が逃げたら、子供は強くなりません。問題児は教職員組合の作品ですが、我々(=男)にも責任があります。この問題児を普通児に変える方法は、「強く」する以外にありません。

少年犯罪の主犯はマスコミと教職員組合

ハードウェアとソフトウェアの混同、教職員組合はこれを意図的に行います。

『物に本末あり。事に終始あり』(大学) ——「事」には時間の経過があります。行動は「事」なのです。女子高生が校門に頭を挟まれて亡くなったのは、校則のせいではなく、校則をうまく使えなかった先生のせいです。「物」のせいではなく、「事」のせい。それなのに、「物」と「事」をわざとすり替えて校則反対を叫ぶとは、誠にタチが悪い。同様に、体罰で怪我をしたのは体罰が悪いのではなく、その仕方が悪いのであって、体罰を否定する理由にはなりません。

力は正義ですが暴力はいけません。暴力は間違った力の使い方です。暴力と力を同一に扱うことは、二重の間違いを犯しています。進歩的文化人がよく使う「教育に力は無用」「暴力の反復性」等々の力の否定論は、論理の矛盾なのです。どうも、日本の「インテリ」は、頭の弱い人が多いようです。

人間は進歩すると強くなります。技術力、知力、体力、気力、精神力…、力がついたことを「強い」といいます。また、進歩とは価値が高くなることです。から、「力がある」と「価値が高い」とは同じ意味になります。強さの否定、力の否定は、進歩の否定、価値の否定に繋がります。

「平等になる」のであって、「平等である」のではないのです。平等とは自分で創るものです。「強者と弱者が平等である」とは、何という矛盾した論理でしょう！みんなが1位、みんなが優秀などというふざけた教育をしたために、子供は進歩できず、幼児の人間性のまま、弱いままに成長してしまいました。その結果、自分でもよく分からないままに、大それた犯罪を犯してしまうようになったのです。

だから、「サカキバラ」も「てるくはのる」も「5千万円恐喝」も「バスジャック」も、本当の主犯はマスコミと教職員組合です。

仁]ではないということ。ついでながら『好楽、憂患』は「知」の間違い、『心焉(ここ)に在らざれば…』は「意」の間違いです。儒教は、精神を「知・情・意」の三つに分けています。(※「ち」は漢字変換できませんでした)

『知仁勇の三者は天下の達徳なり』(中庸)——「勇」は第3回でも述べましたが、「意志」のことです。「知」はすぐにわかります。そうすると、「仁」とは「感情」のことになります。儒教は、「感情こそが最も大事なのだ」といっているのです。

『理性は創るもの』

これまで8回に渡って述べてきたことは、「我々日本人には、西洋流の精神論よりも東洋流の精神論の方が合う」ということです。

『世界人権宣言』に関するところで少し触れたように、戦前の日本では「生まれながらに理性がある」などという戯言は全く通用しなかったし、そんなことは考えてもみませんでした。ところが、敗戦後、急にこの精神論が幅を利かせ、「子供に理性があるのかないのか」といったバカな論争が真剣に行われたりしました。

「進歩的、民主的、子供の立場に立った」等と自認した戦後民主主義の守護者達は、当然のごとく「理性がある」派でした。しかし、彼らは「理性とは何か」の解明はしませんでした。アメリカで吹き込まれたテープを、そのまま日本で流しただけなのです。それが50年後に、学級崩壊というトンでもない事態を引き起こしました。学級崩壊は、日本崩壊と同じ意味です。放っておけば、30年後には日本は崩壊するでしょう。

学級崩壊は起こるべくして起こりました。なぜなら、教育とは「正しく(知)・強く(情)・安定した(意)理性を創ること」だからです。もしも理性が「あるもの」なら、初めから教育は不要ですし、成り立ちません。勝手なへ理屈を並べたて、子供の

ヨットスクールにやってくる若者の特徴は、この感情が弱いことです。感情の弱い者は行動力がありません。すぐ逃げ出し、キレルし、怠け者です。非常にずるく、常に自分を正当化し、弱い。くたびれ屋で、文句ばかりいい、何でも人のせいにします。他人のことを考えることなどできません。まさに今の若者の代表です。

「大学」の2番目のフレーズに『止するを知りて…能く得』とあります。これも、この面から考えてみたらどうでしょう。仏教の『五蘊(ごうん)』や『十二因縁』に相当する、重要なことが解説してあるのです。

首を切り落としたり、バスジャックをしたり、少女を長い間監禁したりする者は、「知育の失敗」です。すぐにかつときて、ムカツクと先生をナイフで刺す者は、「意育の失敗」です。無表情で、何をしても面白くない者は「情育の失敗」。「サカキバラ」も、「てるくはのる」も、バスジャックも、今話題になる少年犯罪者はこれら全ての要素を持っています。教育の完全なる失敗作です。彼らにも「理性と良心」があるというなら、それはこじつけというものです。彼らは、理性も良心も「創られていない」、「完成していない」のです。

まず人間性(=本能)を築け!

理性は「創るもの」です。それは理性の素(もと)から創ります。理性の素とは本能のことです。本能が弱ければ、弱い理性ができます。本能が間違っていれば、間違った理性ができます。本能が不安定なら、不安定な理性ができます。

本能とは、別の言葉でいえば人間性のことです。まず人間性を完成させ、それを素にして理性(社会性)を完成させるのです。教育は、人間性が完成していることを前提に行われるものなのです。「独を慎む」(大学)、「浩然の気を養う」(孟子)は、人間性の完成を目指した言葉なのです。

例えば「罪の意識」という本能は、他人に危害を加えようとした時、加えた時に発生する不快感のことです。人は『快を求め、不快を避ける』の原則により、罪の意識から逃れるために、その危害を加える行為を中止します。しかし、本能が狂っていれば「罪の意識」はうまく発生しません。無表情の少年は情動(本能レベルでの感情)が弱いから、罪の意識も弱く、十分に機能しないのです。本能レベルで意志が弱ければ、罪の意識が持続しません。少年達は、既に本能の段階でおかしくなっているのです。本能がおかしければ、正しい教育を受けてもなかなか正しい理性ができ上がらないのに、ダメ押しのように間違った教育まで受けているのですから、彼らがああなるのも無理はありません。

教える側の人間性が問われる

さて、我々の側のことを考えてみましょう。ナイフ少年は意志が弱い、だからすぐにキレル、ナイフを使うのをやめられない、まことにけしからんことです。しかし、彼らを責めるなら、我々

は彼らの意志を強くする方法を知っていません。「我慢させろ」ではダメなのです。ヨットスクールでは、コーチに次の自覚を求めます。すなわち、

「教えることができるのは、自分でできるところまでである」
知っていてもダメ、できなくてダメなのです。ナイフ少年の先生達の「人間性」はどんなものだったのでしょうか。十分な人間性があり、教えることにだけ失敗したのか、それとも、そもそも先生自身がその人間性を創り損なっていたのか、あるいはその両方なのか…。

教育を正常化しようと思うなら、現状の分析が十分に行えなければなりません。それには現場にいなければ駄目なのです。「教育改革国民会議」のメンバーを見て、疑問が湧いてこないでしょうか。現場を知らない文化人や大学教授に、何がわかるでしょう。そんな彼らに、問題児を1人預けたとして、果たして直すことができるのでしょうか。たった1人を直せない人間が、日本中の子供に影響を与えるようなことをしてはなりません。

『進歩に見放された子供達』

「進歩」は人間の宿命です。人間は進歩しなければなりません。その進歩は「学習」によって行われますが、学習とは、いわゆるお勉強ではなく、行動が伴わなくてはなりません。

『学びて時にこれを習う』(論語)

「習う」の解釈のできない人が多いのには驚かされます。

『逝(ゆ)く者は斯(かく)の如きか。昼夜を舍(や)めず』(論語)

『苟(まこと)に日に新たに、日々に新たに、又日に新たなり』(大学)

『諸行無常』(仏教)

我々の精神論は、「全てが変化する」という真理から始まっています。「絶え間なき造化(創造変化)」です。正しく変

化することが進歩であり、創造ですから、「生まれながらにして理性がある」は、東洋流精神論にはあり得ないことです。

「子供に理性があるか、ないかの論議など、ちゃんちゃらおかしい」と、孔子様もお釈迦様も一笑に付されることでしょう。

『学びて時にこれを習う』(論語)

『民を新たにする』(大学)

『道を修むる、これを教えという』(中庸)

これらが、論語・大学・中庸の最初の言葉であるのは偶然ではありません。仏教でも、最初のお経(転法輪経)では「八正道」(進歩の仕方)について書かれています。

学習障害児は虚栄心の固まり

学習障害児は進歩しようとしません。つまり、人間としてあらねばならない姿を拒否しているわけですから、人間であることを拒否しているのと同じです。野生の動物なら、こんな子供はすぐに死んでしまいますから、彼らは動物にもなれません。彼らが目指しているのはペットなのです。親の方も、自分の子供を人間としてではなく、ペットとして扱ったのではないのでしょうか。

専門家は、学習障害児を脳障害であるかのようにいいます。しかし、現場でそうした子供達に接している我々には、信じられません。なぜなら、そのような子供もスクールで直るし、軽度から重度の事例を見れば、悪くなる過程も分かるからです。学習障害児は最初から障害児なのではなく、そうになっていく時間的経過があるのです。

学習障害児に共通するのは「弱さ」です。わがまま、私の強さ、虚栄心。そういう弱さゆえのよろいを、彼らは着ています。ですから、当然人の言うことを聞こうとしません。それがだんだん癖になり、人の言うことが聞けなくなり、更には反射的に拒否するようになっていきます。我々は、そんなダメ子供の言うことなど聞きません。そんな奴の言うことは間違いに決まっているし、我々のプライドが許さないからです。子供の言うことを大人が是認してしまったら、それは子供の方が大人より偉いということになり、先生が子供にとって「ダメな奴」になってしまいます。「叱るより褒める」で育てられた子供は、実力がつかないのでプライドはできず、代わりに虚栄心ができます。当然、先生の言うことを聞く気がなくなるし、聞けなくなります。

アメリカかぶれの戦後教育が原因

『恥を知るは勇に近し』(中庸)

「勇」とは進歩のための意志のことですから、恥を知らない子供、恥を恥とも思わない子供は、進歩から見放された子供です。褒める教育、平等主義、自主性尊重、フリースクール等、戦後もてはやされた教育法は、このような進歩に見放された子供達を大量生産してしまいました。だいたい、マスコミが口を揃えて言い出すことは、まず嘘だと思った方が無難です。

「進歩したい」というのも人間の本能です。この本能から「敬」や「恥」という理性が生じ、人間に進歩のための行動をさせます。

『開・示・悟・入』

これは仏教にある、教育における因縁の法則です。この「開」が子供の教育を受けようとする本能、心を開くという本能です。学習障害児は、明らかにこの部分がおかしいのであって、本能が低下しているか、あるいは狂っているのです。その本能をもとにして理性を創るというのに、それを間違った方法で創るのですから、もう子供の理性はめっちゃめっちゃです。

学習障害児は、戦後精神論の当然の帰結です。これは、理性のあるものとし、本能を悪者としたキリスト教思想を、我々異教徒が、そのまま受け入れてしまったことが原因です。あれは、真のキリスト教徒でなければ正しく使うことのできない思想だったんです。ですから我々は、分からない部分を無視するか、どうしても使いたかったら、真のキリスト教徒に教えを請うべきだったのです。

我々は『独を慎む』(大学)『浩然の気を養う』(孟子)といった先賢の教えを、充分理解していなかったに違いありません。もし理解していたなら、戦後のアメリカかぶれに充分なる反撃ができたはずで。

『幸福、喜び、感謝』

優しいお母さんは、子供に幸福になってもらいたいと願っています。そして、幸福にしようと努力します。しかし、非行、登校拒否、家庭内暴力、親殺し、子殺しと、現実は逆の方に進んでしまうことが少なくありません。

これは、「幸福とは何か」をよく考えずに子供を扱ってしまうからです。「幸福」とは「喜び」という本能から創られるものだとすることをまず押さえておかないと、子供を幸福にはできないのです。

「喜び」という感情が強くなければ、「幸福感」は得られません。巷にあふれている無表情な子供達のように、感情のない子は幸福になれないのです。我々にとって「気味の悪い奴」でしかない彼らは、何のために生きているのか分からない、味気ない人生を送っています。

自分の行動抜きに「幸福」にはなれない

「幸福」とは、進歩した時、あるいは自力で価値を獲得した時に生じる「喜び」のことです。本人が行動しなければ、幸福にはなれません。ですから、「子供を幸福にしてやろう」などと、大それたことを考えてはいけません。子供は自分で幸福になるのです。

我々は時々、「子供を幸福にしてやった」と思うことがあります。欲しがっているおもちゃを買ってやった時、子供のうれしそうな顔を見ると、我々もうれしくなってしまいます。しかし、これは子供を幸福にしたのではなく、「感謝」をさせたにすぎません。この「感謝」と「幸福」をごっちゃにしてしまうから、物を与えすぎてしまうのです。

価値を自分で獲得した時に発生する喜びが「幸福」。価値を人から与えられた時に発生する喜びが「感謝」です。「幸福」は自分の力であるもの、獲得するものですが、「感謝」は他人の力によるもの、与えられるものです。他人に頼ってはい決して幸福にはなれません。自立的、行動的でなくてはならないのです。

「進歩」というのは自分の価値を高めることから、進歩の結果、我々は幸福になります。これが『民をあらた新にする』(大学)ということの意味です。

『日々に新たに、又新たなり』(大学)——毎日、進歩するように仕向けるのが権力を持つ者の義務です。親も先生も子供に対しては権力者ですから、子供を進歩させる義務があります。しかし、「物を覚える」という今の教育のあり方は、残念ながら進歩にはつながりません。精神の進歩とは、「物の見方(正見…仏教)、考え方(正思…仏教)」を高めることです。『慮(おもんばかりる』(儒教)、『慎んでこれを思う』(中庸)ことにより、精神は進歩します。

本能を強くし、「幸福」になる能力を高めよう

う

知識を得ること、覚えることは、「正見・正思」に到るための手段の一つに過ぎません。これは、我々がやっている、ウィンドサーフィンのようなスポーツに置き換えてみるとすぐ分かります。「ウィンドサーフィンの上達法」なる本を何百回読んでも、乗れるようにはなりません。

『学びて、時にこれを習う』(論語)——「習う」とは、繰り返すという意味です。行動しなければ進歩はありません。

これは精神でも同じことで、「考える」という精神的行動を抜きにして、進歩はあり得ないのです。大学受験の秀才が、精神的には非常に低い(幼い)のは、進歩していないからです。近頃多発する、元秀才が起こす凶悪事件も、その精神性の低さ故です。

受験秀才は、自分が精神的に優れた人間であると信じ込んでいます。人にもそう言われて褒められます。しかし、その実感がありません。当然の結果である幸福を感じないのです。そこで、さらに人に褒められることで、それを実感しようとしています。ヨットスクールによく来る、ものすごいおしゃべりは皆このタイプです。しかし、どんなに知識を披瀝しても、みんな嫌がるばかりです。すると彼らはさらに本を読み、テレビを見て知識を増やしますが、結局また嫌がられます。この状態が『輪廻転生』です。『無明』(間違った知識)がなさしめるのですから、正しい法則をつかみ、輪廻を打ち砕かねばなりません。

今の受験問題が物覚えのいい人間に有利になっている限り、このような秀才は増産されます。これは、受験問題を作る人の資質の問題で、その人達もまた、同じタイプの秀才だったのでしょう。

くではありません。強い感情を持ち、恥を知る力で強い意志を発生させなければならないのです。

『科学的な"精神論"を創ろう』

教育崩壊が起こったのは、我々男の責任です。男が自分の責任を再認識し、義務を果たせば、教育は正常化し、日本は救われます。日教組、教育委員会、文部省、マスコミも大学教授も、カウンセラーも精神科医も、教育には無力であると分かったはずです。もう頼むに足る権力者は存在しません。

権威に従うのは日本人の美德です。これによって日本人は共通の意志を持ち、日本を進歩させてきました。

自己を全体の下に置くことができるのは、男が強いからです。弱い男は自分のことしか考えられませんから、周りや国、まして国の将来のことなど思いも及びません。

弱い男は、本来美德であるはずのこの本能から、正しい理性を創ることができず、権威に盲目的に従うだけの人間になり下がります。だからマスコミは、今のような力を持つようになりました。

しかし、これは当然、日本が強くならないことを願う外国勢力に利用されます。

あるいは、この美德が逆になって現れます。自由だ、権利だ、自主性だ、個性だと、権威に従わないことを正当化する理由を創り出すのです。

幸福になるには、喜びが大きくなってはなりません。「幸福」とは、「喜び」そのものなのです。それには、「本能が強い」ということが必要です。『浩然の気を養い』(孟子)、『独を慎む』(大学)、つまり訓練する必要があるのです。また、行動力がな

「考える」ことは精神的行動

強い男は行動的です。精神とは、肉体と精神を行動させるためにあるのだから当然です。

精神が精神を行動させる、と言うと奇妙に聞こえるかもしれませんが、仏教や儒教で言われるとおり、精神的行動とは「考える」ことです。そして、人間のみが精神的行動を行うことができます。

「覚える」ことを目的とした今の教育は、とても「人間的」な教育とは呼べません。

いわゆる知識というものは、考えるための手段の1つに過ぎません。ですから、知識を詰め込んだだけの秀才に、考える力などあるはずもないのです。そのような秀才が有名大学に入り、日本のリーダーとなる。リーダーに考える力がないいうところに、日本的な諸問題が生ずるのです。

彼らには戦略論がなく、ことごとく現場を軽視します。どんなに素晴らしい戦略といえども、それを実現するのは現場です。現場に暗い人間は、戦略家たり得ないのです。

今の教育が知育偏重になってしまったのは、大学の入試問題の質が悪いからです。本当は、「覚える」力ではなく「考える」力のテストをしなければなりません。大学入試が「考える」力を問うようになれば、小学校からの教育は変わでしょう。それだけでも、教育は随分と正常化するはずで

大学教授が、日本の教育を悪くしている。彼らは戦略論がないために、逆のことをやっています。

"科学"で教育を立て直す

文化を自分達で創らず、外国から輸入し、それを日本的に改良して本国より優れたものにしてしまう。これは日本の伝統です。飛鳥の昔、いやもっと前からそうでした。

それはそれで素晴らしいことですが、インテリや権力者には問題が生じます。外国の文化をより多く知っている人が「偉い」ということになり、いわゆる知識人がイニシアチブをとってしまからです。

『儒弱、国を誤る』の言葉通り、弱いインテリに権力者の資格はありません。しかし残念なことに、日本のインテリは(多くの場合)、精神的に弱い。自国をバカにし、外国かぶれになってしまうのを見ればわかります。思い起こせば、戦後、パリ祭を銀座で祝った、バカな文化人がいたではないですか。

日本が戦前までうまくやってこられたのは、輸入した精神論である儒教や仏教が、"科学"だったからです。"科学"であればこそ、猿まねをしても大過ありません。

しかし、戦後に輸入された精神論は違います。世界人権宣言の第1条を読んでみてください。あれは天動説です。全く非科学的な、キリスト教思想の押しつけです。あの第1条を使いこなせるのは、神と契約をし、聖書をきちんと読むキリスト教徒だけであり、我々異教徒には無理なのです。

戦後教育には、外国は全て正しいとし、自分で物を考えようとなし、日本的インテリの欠点がまともに出てしまいました。外国かぶれで日本をバカにし、現場の意見を聞こうともしません。

「教育改革国民会議」のメンバーを見て下さい。教育には素人の、文化人の集まりです。彼らに戦略論などできるはずありません。政府がダメだから人選ができないのです。

何が正しくて、何が間違っているかは理論が決めます。好き嫌いで決めてもダメ。「嫌なものは嫌」は非科学的なのです。

我々が今なすべきことは、科学的な「精神論」を創ることです。難しいことではありません。すでに2,500年も前に、儒教や仏教という"科学"が完成しているからです。後は、それを日本的にアレンジすればいいだけです。